

「ぶどうべと病」について





写真1 発生初期 ぶどうべと病 病斑
撮影：平成 29 年 8 月 3 日 長野市内



写真2 「写真1」の葉裏 白色のカビ



写真3 ぶどうべと病菌 顕微鏡写真 300 倍 撮影：平成 29 年 9 月 28 日

 が「分生子柄」、樹枝状の先端に、 の「分生子」を形成する。

- 1 伝染：被害葉組織内で「卵孢子」で越冬。6月から7月頃、被害葉が腐ると孢子発芽して分生子柄を生じ、その上に「分生子」を形成する。この「分生子」が風で飛散して「葉」に達したり、雨水と共に地表に落ちて発芽し、1個の「分生子」から60以上の「遊走子」を形成して一次伝染源となる。「遊走子」は、雨水で跳ね上がり葉裏に付着、発芽して、葉裏気孔から侵入。数日～2週間の潜伏期間を経て発病する。更に4～5日には、病斑の裏面に「分生子」を形成（写真2）する。
- 2 被害：被害が激しい場合は、葉柄を残してほとんどが落葉する。早期落葉により新梢の枯死、果実糖度の低下などとなる。枝の枯死等により、翌年の作柄にも影響を及ぼす。
- 3 対策
①耕種的防除 薬剤が良くかかるように新梢管理を徹底する。
②薬剤による防除 発病してからの防除では手遅れであるので、展葉6～8枚期頃から定期的に「予防散布」を徹底する。薬剤のうち「QoI剤」は、すでに耐性菌が出現しているので、原則としてへど病防除には使用しない。